

特集●日本近現代の作家と西洋

近代日本文学における外国語体験

——翻訳のダイナミズム

野崎 歓

1 日本語・日本文化に与る外国語

二〇一九年四月一日午前一一時四〇分、菅義偉官房長官は集まった記者たちを前に新たな元号を発表した。官房長官の掲げた額には毛筆の文字で「令和」と記されていた。続いて安倍晋三首相が会見を開き、「令和」の典拠は万葉集であり、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められている⁽¹⁾と説明した。

首相はさらに、記者との質疑応答をとおして、元号の典拠が中国の漢籍ではなく、初めて日本の「国書」になった意義を強調した。首相によれば万葉集は「一二〇〇年余り前に編さんされた日本最古の歌集であるとともに、天皇や皇族、貴族だけでなく、防人や農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ歌が収めら

れ、我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書」なのである。

『万葉集』の性格づけに関しては国文学者による専門的な検討に委ねるほかないが⁽²⁾、ここでは「国書」という単語にのみ、注目しておきたい。国語辞典を引くと「漢籍・仏典・洋書など」に対して、日本で著述された書物。和書」という説明がなされている。しかし「日本で著述された」からといって、われわれにとって『万葉集』がすらすらと読みやすい言葉で書かれているわけではないことはいうまでもない。首相は記者会見において、典拠となった箇所を次のように読み上げた。「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫す^{（かもち）}」。もちろんこれは、原文の訓読を用いたのである。『万葉集』巻五、「梅花調卅二首并序」の以下のような原文を前にした

ら、われわれはたちまち読みに詰まってしまっただろう。

「于時、初春令月、氣淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香」⁽³⁾

『万葉集』の原文はすべて漢字によって表記されている。中国語の文字を借用することによって初めて日本語の表記が可能になったわけである。逆にそうやって書き連ねられた漢字のみからなる文の読み方は、『万葉集』を適切に訓読するための研究が始まってから千年以上を経た今も揺れ続けているし、いまだに読み方のわからない箇所がたくさん残っている。つまり『万葉集』が「外国語」で書かれた文書という性格を濃厚に備えていることは否定のしようがない。内容に関しても、くだんの「梅花の歌」の三十二首の基盤となっている、梅の花を愛で、その気持ちを歌って楽しむという姿勢は、中国の詩の伝統に学び、それを取り入れたものだった。梅という植物自体が中国渡来であり、「当時の貴族たちからそのエキゾチックな香りを愛され、好んで邸宅に植えられたものであった」⁽⁴⁾。つまりわれわれは「国書」が象徴する「我が国の豊かな国民文化」が、いかに外国——当時でいえば圧倒的に中国——の文化の影響を被り、外国に学ぶことによって成立したかを改めて認識するべきだろう。異国の文物に対して開かれた態度、未知なるものを摂取し同化するダイナミズムが、「豊かな伝統」を創出してきた

のだ。

そうした視点に立つて日本文学と「外」との関係を考えてみると、中国文化の伝来にも比すべき第二の巨大な出来事が生じたのが明治期であった。政治社会全般にわたって、西洋的な諸価値が導入され、それとともに日本語がいわば鑄造し直されていた。そこで決定的な重要性をもったのが翻訳という営みである。

その現場で尽力した人物の回想を引用しておこう。江戸の津山藩邸に生まれ、著名な蘭学者の祖父に育てられた箕作麟祥は、一八六七年にパリ万博視察団に随行したのち、留学を経て帰国後、フランス刑法典・民法典の翻訳を任された。「基本は実に、分らないことだらけでありました。また分つても、翻訳語が無いので困りました。権利だの義務だのと云ふ語は、今日では、あなた方は訳のない語だと思つてお出ででありませうが、私が翻訳語に使つたのが、大奮発なのでござります」⁽⁵⁾。対応する観念のない抽象語の翻訳というアクロバティックな作業の連続の中から、新しい語彙や表現が日本語に加わっていった⁽⁶⁾。

2 『当世書生氣質』と英語の氾濫

押し寄せる外国語の奔流に採まれながら新たな時代を生きる人々の姿は、明治の小説の中に克明にとらえられている。とりわけ興味深いのは若者たちの日常会話のありようだ。「小説の

主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」という『小説神髓』（一八八五―一八六六年）の理念を実地に移し、坪内逍遙が明治一〇年代の東京の学生生活を活写した『当世書生気質』（一八八六年）を開いてみる。「書生」の語は「文字通り本を読む人、学生の同義として用いられていた」⁽⁷⁾。そこには著者の東京帝国大学の一橋寄宿舎時代の経験にもとづく挿話がさまざまに盛り込まれているが、とりわけ興味を引くのが学生たちのやりとりにあふれるカタカナ語だ⁽⁸⁾。

学生同士がおしやべりを始めると、「吾輩のウオツチ（時器）でハいまだテンミニツ（十分）位あるから」（四三ページ）云々と、たちまち英語だらけのやりとりになる。「フハザア（家大人）」（六五ページ）や「マザア（母親）」（六七ページ）「シスター（妹）」（六九ページ）といった基本単語もカタカナ英語に置き換えられがちだし、「君。すこしくエム（モネイの略にて貨幣といふ事）を持つてハ居まいかネ」（五八ページ）などと英語経由の隠語も活用されている。さらには、友人に悩みを打ち明ける場面での次のようなやりとりでは、日本語が英語の引用に侵食されていく。「君も十分プレジユデス（先人の偏見を去って。聞いて呉なくちや困るヨ）」「そんな御心配ハノウ、ニイド（無要）だ。酌量減刑は僕の手にありサ。ビー、シユアー、ヲフ、エ、フヘヤ、ジャツジユメント（大丈夫だヨ。公平な判決をするから）」「オウ、ノウブル、ジャツジ（イヨウ、判事さま）」（八九ページ）。このあたりは逍遙が注をつけていると

おり「人肉質入裁判といふ院本」すなわちシェイクスピア『ベニスの商人』を踏まえたやりとりであると気づくことが、読者には求められているのである（『ベニスの商人』は一八八四年、井上勤によって『人肉質入裁判』の題で訳されている）。

これは必ずしも、作者がやがてシェイクスピア全集の翻訳によって名を成す英文学専攻の文学士であるがゆえの描写とはいえないだろう。英語の古典が原文で口をついて出るほどの西欧文化摂取熱が、まさに当時の書生気質の重要な一側面だったことを示すものに違いない。そもそも彼らにとって「ブック」といえばそれは「洋書」を意味していたことが本書の記述からうかがえる。「僕ハいつか話をした。ブック（書籍）を買ひに。丸屋までいつて（……）今帰るところだが。」（四二―四三ページ）つまり日本橋丸善に出かけて洋書を買ってきたのである。学生たちは書物をとおして西洋の文化とつながっており、そこから汲み上げた言葉を自分たちの日常の会話にあふれさせている。しかもこの作品は、たんにカタカナ英語を氾濫させるのみでなく、引用に示されているとおり、注にその和訳をつけることで日本語に新たな表現を加えようとする意欲をもみなざらせている。たとえば友人同士の恋愛談義で、学生の一人が「Frailty, thy name is woman」と『ハムレット』のせりふを口にする、すかさず「脆きハ女子の心かな」と注が付される（一八〇ページ）。そこには英語の文章を日本語で味わい直そうとする姿勢が見て取れる。翻訳のプロセスが小説のうちに組み

込まれているといえるだろう。そして学生がいそしむ割のいいアルバイトは翻訳であり、登場人物たちは「百科通覧の中から、政事に関する事と農工業に関する事を抜粋して訳する」仕事で小金を稼ごうとくろんでいる。

さらに小説の内容に即しても、翻訳的なプロセスの重要性を指摘することができる。『当世書生気質』の中心的なストーリーは、主人公と目される小町田繁爾とお芳のあいだのロマンスによって形作られていく。しかし幼なじみのお芳が芸妓に身を落としていたという設定が示すとおり、男女の恋物語はいまだ前時代的な遊里趣味にとらわれている印象がある。「グウド。ブレイン」(六五ページ)なる英訳直訳名で呼ぼうとも、「吉原」が江戸時代以来の遊郭である事実に変わりはなく、学生の恋愛の相手はもっぱら職業的な女性たちである。そもそも「恋」や「恋愛」という単語は彼らの会話にまだ登場せず、そのかわりloveという動詞・名詞をたえず用いて恋愛問題を語りあっている。「小町田のラブしちよる女じやネ」(一五八ページ)、「シンガア(芸妓)のラブ(狎客)」(同)「所謂恋情」(向ふからラブ「惚る」してくれば」(一六四ページ)「僕ア君のラブ(意中人)のレッタア(てがみ)を見たヨ」(一七九ページ)「一旦ラブ(愛)した位なら、飽くまでラブするがいいじやアないか」(二八〇ページ)といった調子である。芸妓との色恋沙汰を西洋的なloveに翻訳し得るのかどうか、あるいはまたloveに対応するような内実を芸妓との関係に求め得るのか。近代的な恋愛

文学が成立する一歩手前において、小説というジャンルがそうした問いを提起していたことを、カタカナ英語の入り乱れる事態をとおして、逍遙作品は雄弁に示している。

3 谷崎潤一郎と外国語の誘惑

『当世書生気質』の六年後、明治元年生まれの若き北村透谷は『厭世詩家と女性』(一八九二年)で「戀愛は人世の秘鑰なり、戀愛ありて後人生あり、戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ」⁽⁹⁾と声高に訴え、恋愛観の近代化を唱えた。以後、いかなる恋愛を描き出し、男女の關係に新たな次元を切り拓くかは、作家たちの大きな課題であり続けた。

しかしここでは、恋愛のテーマの変遷を追うのではなく、作家と外国語の体験に焦点を絞り、そこに創作にとって重要な要素がひそんでいたことに注目したい。一方では、西洋崇拜者であることをもって任じた谷崎潤一郎、他方では、もっぱら日本の土着的文化に根ざす作家かと思われる井伏鱒二という対照的な例をとおして、さらに考察してみよう。

谷崎文学の背景をなす豊かな文学的素養について、研究者は次のように指摘している。「明治時代に教育を受けた、ごく少数の選良たちに共通して言えることで、彼らが幼くして身につけた徹底した漢学の素養と、日本人からではなく直接その国の人から受けた外国語教育とが、もともと本人が持っていた英才

を刺激した結果にちがいない」⁽¹⁰⁾。その際、谷崎的な特色として、外国語教育および外国語との接触に、ある種のエロティシズムを見出そうとした点を強調できるだろう。

それはもちろん、谷崎が熱烈な憧憬を抱いて西欧の文物を 수용しようとしたことと関係する。その点で、谷崎が永井荷風を先駆と仰いだのはまちがいない。「自分は西洋の女と、英語であれ、フランス語であれ、西洋の言語で、西洋の空の下、西洋の水のほとりに、希臘^{ギリシャ}以来の西洋の藝術を論ずる事が何よりも好きである」。荷風は『あめりか物語』(一九〇八年)でそう記している⁽¹¹⁾。アメリカからフランスへと異国生活を続ける中、そうした嗜好の赴くがまま、実地での経験を重ね得たがゆえに、帰朝者としての荷風は格別のオーラを身にまとったのもあった。

異国に旅立ちたくても旅立てない者として、谷崎は荷風のな実践への夢をつのらせた。そのいわば欲求不満状態を背景に綴られた「独探」(一九一五年)は、谷崎における外国語の意味を考えるうえで好個の素材を提供してくれる⁽¹²⁾。

冒頭から披露されているのは、自らがどのように英語を学んだか、さらにいかに英語の才能を欠いた人間であるかということである。

「私は恐らく小学校の高等一二年の時分、十一二歳の頃に、始めて築地のサンマアという女異人の塾へ通わされて英語を習った。それが私の西洋人と云うものに接した最初の経験であつ

たと記憶する。それから日比谷の府立中学へ入学して四年級になった年、ミッス、エマソンというアメリカ人の老嬢から、プラクチカル、イングリッシュを教わった筈である。何故「筈である」かと云うのに、私は二年間その老嬢の赤い薄い唇から洩れるイギリスの国語を耳にしたにも拘らず、私のプラクチカル、イングリッシュに関する能力は、一向進歩しなかった。」⁽¹³⁾十代初めからネイティブの指導を受けたにもかかわらず、実践的な英語力は身につかなかったと谷崎は嘆く。「年のわりに若くて美しかった」云々という、「老嬢」への視線には欲望がこもっている。ところが「私はいつ迄立っても、少し込み入った会話になると、老嬢が何をしゃべって居るのやら分からなかった」。その結果、「劣等な同級生の二三の者が、自由に老嬢と会話を試み、教室以外の交際までも続けて居る」のを見るのに、「私は自分が先天的に外国語を話す才能を缺いて居て、西洋人に接近する資格のない人間であることをつくづく感じた」というのである。こうした述べ方はいかにも作家の実感に即したものであるが、しかしそこに自己演出の意図が含まれていることも明白だろう。西洋人に接近したいにもかかわらず、「先天的」な欠陥ゆえにその願望を決して叶えることができない、一種の呪いを身に帯びた自らの姿が描き出されている。それは実のところ、作家のいわゆる「Masochisten」(「饒太郎」一九一四年)としての趣味を満たすのに打ってつけの設定を作り出しているとも考えられるのだ。

さらにいえば、大正期谷崎においてはそうしたマゾヒズムはときに「西洋」を前にしてあまりに劣った「日本」という二項対立をも招き寄せる。「独探」の出発点はまさにそこにある。「私は自分の胸の中に燃えて居る痛切な藝術上の欲求が、到底現代の日本に生まれて日本人に圍繞いじょうされて居ては、満足されるものではないことを発見した。自分を生んでくれた現在の此の国土には、不幸にも自分の「美」に対する憧憬しょうけいを、充たしてくれる何等の対象をも見出すことが出来なくなった。」(一二二ページ)。その結果、「私は自分の周囲に対して激しいContemptを感じるようになった」。「日本畫」だの「三絃の音」だの「端唄浄瑠璃」だのに比べ、西洋の芸術はいかに偉大であるか。そう思うにつけ「私は人間が神を仰ぐように西洋を見ずには居られなくなった」(一二四ページ)とまで作家は記す。

「独探」で描かれるのは、そんな作家が憧れの西洋に一步でも近づきたいと願って、外国語の「出教授できょうじゆ」を頼んだところどうなったかという顛末である。作家は友人から「G氏」なる教師を紹介された。「同じ西洋人でも私は特に女の知人を望んで居た」のだし、「自分の文藝上の趣味から云つて、仏蘭西人を最も好んだ」(一六一―一七ページ)のだったが、G氏は男性であり、「墺太利の臣民」だった。そこからしてすでに理想のレッスンとは掛け違っていたわけである。以後の物語であぶりだされるのは、まずは外国語を学ぶことが必然的に孕まずにはいないさまざまな滑稽さや不自然さである。作家がフランス語の手

ほどきを受けるのに対し、その友人の「浅川」はドイツ語を習う。浅川の授業の様子を覗き見して、「純徳川式の、洪くて意気な、金のかかった衣裳を着こんだ」浅川が「巻き舌の江戸弁」で、もみ手をしながら「複数の時も女性の時もやっぱり口を使いますんで」(一二二ページ)と質問するさまに、作家は腹を抱える。しかしもちろん作家自身のフランス語学習も、そうしたちぐはぐで頓珍漢な性格を帯びないわけにはいかないのである。

やがて明らかになるのは、「あなた今から文法を考えてはいけませんでエス」などと達者な日本語を駆使するG氏なる人物が、かなりの食わせ者であり、無教養、無知な男であつて、行状にも好ましくあらざるところがあるという事実だった。彼に語学を習う生徒は徐々に減っていき、風采も「だんだん物臭く貧乏たらしく野卑やひになつて」(一二五ページ)いった。そこにはのちの『痴人の愛』(一九二五年)で豊かに展開されるような、教師役の男の転落という主題が先取りされている。そこで重要なのは、G氏のそうしたいささか期待外れのありようによつて、作家のむやみな西洋崇拜が、少なからず相対化されたということである。実際、「比の国の貴族として生きるよりは、まだしも彼の国の奴隸どれいとして育つ方がどのくらい幸福であろう」(一二七ページ)などと思ひ詰めていた「私」に、G氏は「西洋人」なるもののひとつの実相を身をもって示したのである。しかもそのとき、G氏は作家にとつて貴重なイニシエーションを施す存在ともなった——憧れの西洋文化ではなく、作家の視界のうちに

入っていないかった未知の日本へのイニシエーションである。

ともに「ロシア女のバア」で遊ぶなどして親交を深めるうち、Gは「西洋の女が日本の女より優れて居る」と思ったら非常な間違いです（五四ページ）^{すく}と云って、作家の「イルジオンを説破しよう」とする。そして「日本の女を無闇と褒め」（五五ページ）、これまで日本の娘たちから受け取ったという恋文の数々を示すのだ。そのなまなましいドキュメントを見て作家は意外の感に打たれる。

「私はその奇怪な拙劣な手紙の文句の中に、外国人の眼に映ずる日本の女の珍らしさ不思議さが、躍動して居るように覺えた。日本人同士の間では、到底見る事の出来ない日本の女の物好きと露骨とが、そこにまざまざと現れて居た。それ等の手紙は私に対して、非常なエキゾティックな感を与えた」（五七ページ）

ここにエキゾティシズムの逆転、顛倒が起こっているのは明らかだろう。G氏は「外国人の眼」を作家に貸し与え、彼の知らずにいた日本女性の「躍動」を実感させた。G氏は作家に対し、媒介者としての役割、あるいはそれまで眼前にありながら読み取れなかったものを読み取れるようにしたという意味では、比喩的に「翻訳者」といってもいいような役割を演じたのである。彼の介入によって未知の日本が「まざまざと」啓示され、作家は「日本の女の偽りなき美しさ」（五八ページ）を「新発見」した。その「媒介＝翻訳」者が「独探」、すなわち第一次

大戦における日本にとつての敵国のスパイとして捕まるというなりゆきはいかにも意味深長だ。

「全くG氏は独探ではなからうと信じつつ筆を執つて居た」（六七ページ）という作家のうちには、「西洋人好き」な自分にとつていささか期待外れな西洋人であったとはいえ、西洋のみならず未知の日本への視野を開いてくれたG氏に対する感謝や親愛の念が芽ばえている。冒頭ですでに告げられていたとおり、G氏は「都下の新聞紙上に普くその名を曝されて、日本を放逐されてしまった」（九ページ）。だがそうした迫害と不名誉は逆に、G氏と作家のあいだに一種の想像上の絆を生じさせるものではなかったか。数年ののちには作家自身がいわゆる「日本回帰」を果たし、とりわけ関西の女性に焦点を合わせた作品に精力を注ぐことになるのは興味深い符合である。

大正期の自らの文学を振り返って、谷崎は回顧している。「当時私は、今でも多くの青年たちがそうであるように、務めて西洋文臭い国文を書くことを理想としておりました」⁽¹⁴⁾。日本語にできるだけ西洋の言葉のような様相を帯びさせようとするそうした試みから正反対に舵を切り、谷崎は日本語の内部に息づく異なる言語としての関西弁に耳を澄ませ、寄り添おうとする。その成果が『正』（一九三一年）である。

「先生、わたくし今日はすっかり聞いて頂くつもりで伺ひましたんですけれど、でもあの……折角お仕事のところをお宜しいんでございますの?」「改造」連載第一回の冒頭においては、

女の語り口はいまだほぼ「標準語」といつていい。それが最終的には「先生、わたし今日はすっかり聞いてもらふつもりで伺ひましたのんですけど、折角お仕事中的ところかまひませんですやろか？」といった地元言葉にすっかり変貌を遂げる⁽¹⁵⁾。その裏には標準的な日本語を関西の一地域の言葉に翻訳しようとする谷崎の懸命の努力があった⁽¹⁶⁾。

ローカルなものにひそむ魅惑に目を開く進展が、もっぱら「G氏」の教えの賜物だというつもりはない。だが、ともすれば関西移住以前・以降の谷崎文学に断絶を見出し、大正時代の作品に意義を認めない通説には大いに再検討の余地があるだろう。「独探」であれ『正』であれ——さらには『春琴抄』であれ『細雪』であれ——異なる言語への欲望にとらわれ、未知の言葉が及ぼす魅惑に身をさらし続ける点で、谷崎という作家はみごとにまで一貫していた。

4 井伏鱒二と翻訳による創造

井伏鱒二が早稲田大学文学部の学生時代、フランス文学専攻に所属していたという事実は、「山椒魚」や『黒い雨』の読者にはおそろくほとんど意識されていないだろう。そもそも親友がフランス文学科に進むのでそのまねをして入っただけで、フランス語はまったく勉強しなかったと井伏は述懐している。谷崎的な西洋崇拜とは無縁なのが井伏の文学世界であり、フランス

文学のみならず外国文学への傾倒もさほど感じさせない。

では、井伏には外国語体験というべきものは皆無だったのかといえはそんなことはない。たとえば彼は少年時代、四国旅行の折に松山で、第一次大戦で捕虜となったロシア人の少年とわずかな間ではあるが触れあう機会を持ち、いくらかのロシア語単語を脳裏に刻んでいる（松山におけるイワン」一九三八年）。以降の作品において、彼はさまざまなかたちでロシア人の姿を描き出している⁽¹⁷⁾。ロシア人のみならず、中国人からイルランド人に至るまで、外国人の姿や外国語の響きは彼の小説やエッセーの意外に重要な要素をなしているのだ。

しかしここでは、井伏の文学的出発点に注目して、彼がまず小説家ではなく翻訳家としてデビューしたことの意味を考えてみたい。井伏が最初に刊行した本はドイツの作家「ズウデルマン」の翻訳であった。ヘルマン・ズーダーマン（一八五八—一九二七年）は自然主義の劇作家・小説家として知られ、とりわけ日本では大正から明治にかけて一定の人気を博していたようである。早稲田を中退したのち「東京で一番貧乏な人間」（『遅い訪問』一九二八年）と自嘲するほどの窮乏生活を送っていた井伏は、手っ取り早く原稿料を稼ぐ方策を翻訳に求めたのだろうか⁽¹⁸⁾。井伏がドイツ語を本格的に学んだ形跡はないから、原作をドイツ語から訳したのではなく、先行訳を参考にしつつ英訳から重訳したのだろうと考えられる⁽¹⁹⁾。『猫橋』と直訳できる原題を『父の罪』に変えたのは、おそらく英訳の副題を流用

したものと思われるが、小説の内容を反映した題になっている。すなわちこれは、「猫橋」のかかる川のほとり、森に囲まれた古城に住む青年——敵国の軍隊に協力した父の罪に苦しんでいる——と、かつて父の愛人だった使用人レギーネの悲劇的な恋物語なのである。

いま読んでみるといささか古色蒼然とした印象を受ける作品ではあるが、しかし若き井伏の訳文は立派なものであり、初めての翻訳とは思えない出来栄えと評価することができる。そこで興味深いのは、やがて開花し始める彼の創作とこの翻訳とのつながりである。ズーダーマン作品は城の外に広がる農村をも舞台とし、村人たちや自然の描写にローカルな要素を含んでいる。その点で、故郷の福山と思しき村を舞台とする井伏の初期作品に通じる部分がある。長らく忘れ去られていた『父の罪』を発掘した浦田佑は、この「訳業経験」が小説家井伏の方向性を「ある程度は決定づけ」たとして、双方に共通する要素を列挙した。さらに浦田は「谷間」は全編これ「猫橋」「『父の罪』」のパロディーと見られる一面も備えている」とも記している⁽²⁰⁾。

だが、まさに浦田の強調するとおり共通する部分を含む『父の罪』と「谷間」であるからこそ、両者のテキストを織りなす言葉そのもののあり方の違いが浮き彫りになるのだ。それがよく表れているのは、登場人物のせりふにおいてである。前者における使用人レギーネと城の跡取りボレスラフの会話は「レ

ギーネ、お前、もう少し清潔にしたら何うだ」「ええ貴方……私、きれいになるやうにいたしませう」といった具合である。まさしく折り目正しい翻訳調というべきだろう⁽²¹⁾。

一方、「谷間」(初出一九二九年、のち『なつかしき現実』一九三〇年所収)におけるヒロインたる少女の言葉は「まあ、いっそ人が悪いんじゃないもの」「いなければならぬことなというたら!」⁽²²⁾という調子で、標準語との偏差が強調されている。少女だけではない。冒頭に登場する老人の「これはこれは、いっそ遠路の旅のかたでありますがな」(二七六ページ)「東京で何の商売をしとりなさる?」(二七七ページ)といったせりふからして、まさに「遠路」はるばる旅した先の土地であることが感じ取れる。それに対し「僕はこの名刺に書いてある通りの名前の方ですが、姫谷焼の窯跡を発掘させていただきたいのであります」(二七六ページ)とか、「僕は子供の時、学校で級長をしていました」(二七七ページ)といった語り手にして主人公の「私」のせりふは、彼が東京からやってきた人間であることを明らかに示している。

要するに、「ズウデルマン」の翻訳において井伏は、地方の人間にその地方の言葉をしゃべらせるといやり方を選ぶことができなかった(また英訳から判断するかぎり、原作は言葉の上でのローカルカラーに対し意識的な作品ではなかった)。だが自らのよく知る故郷を舞台として小説を綴るに際し、井伏はそこで人々が話す言葉自体に、土地の生命を宿らせたいと考

えたのである。標準語による翻訳の抽象性を突き破って、生きた人間の言葉が示されたといえるだろう。そこには翻訳のもたらした反省があったと考えられる。

だがそれだけではない。いかにも土地に深く根付いた言葉の湛える生命感と対照的に、地の文の標準語はいわばその人工性を際立たせる。その対比が井伏文学の出発点において、作品そのものを支えるダイナミズムを作り出しているのだ。「谷間」に続いてやはり故郷の言葉をいきいきと導入した「朽助のいる谷間」(初出一九二九年、のち「夜ふけと梅の花」一九三〇年所収)を見よう。タイトルに名を記す老人・朽助のせりふのいちいち、「若しあんたが立身せなんだら、私らはいつそつらいですが。そんなめに逢うほどならば、私らはなんぼうにもつらいですが」(三二八ページ)といった田舎言葉にこもる真率さによって読む者の胸を打つ。それに対し地の文があらさまなまでにコントラストをなしていることは、よく知られた冒頭が示すとおりだ。

谷本朽助(本年七十七歳)は実に頑固に私を最^{ひい}賤^きしている。私がいかに遠い旅先へ行っている時でも、彼は毎年、秋になって口から吐く息が白い蒸気となって見える時節になると、私に、松茸^{しな}やしめじを送ってくれる。うどん箱に苔を敷いて、濁^なびた茸^{たけ}類を一ぱい詰めこんで、箱の表には必ず「オータム吉日」と記してある慣わしである。

彼はそれ等の茸類の発生する山の番人である。その山は、すでに私の祖父の時代に他人へ売却したものであるにもかかわらず、彼は頑迷に昔からの習慣を守っているのである。(三二五ページ)

最初の一文における「私を最^{ひい}賤^きしている」といった他動詞の用い方からして、「直訳調」が選択されていることは明らかだろう。こうした一見しゃちこばった、背後に欧文の構造が透けて見えるような文章の書き方を井伏は意識的に試みている。主⁽²³⁾題面ではまったくかけ離れた作家と思えるものの、「務めて西洋文臭い国文」をめざした点で、井伏鱒二と谷崎潤一郎は非常に近いのである。外国語との関係において日本語を造り直そう、新たな日本語表現の可能性を求めようとする、明治以来の日本文学の精神を両者は脈々と受け継いでいるともいえる。

井伏の場合、そこには、いまや小説の文章とは不可避的に「西洋文」臭さを帯びざるを得ず、標準語による地の文とは一種の翻訳文であるほかはないという認識もあったのではない⁽²³⁾か。そのいわば人工性を踏まえたうえで、井伏は人物のせりふにはいかにも土着性の強いローカル言語を導入し、双方の差異をユーモラスに浮かび上がらせた。標準語と方言とが互いの違いを示しあい、それぞれの特異さを照らしあうような場所として、井伏の文学は成立した。言語を複数化させ、異質な言葉を共存させることへの意欲は、井伏という作家を支える資質で

あり続けるだろう。

4 おわりに

—「優れた書物は一種の外国語で書かれている」

坪内逍遙、谷崎潤一郎、井伏鱒二という三人の例のみから、日本近代文学と外国語をめぐって何か結論を導こうとするのは無謀かもしれない。しかし相互のあいだに直接の関係をもちたず、作品もまったく性格を異にする三人の作家が、そろって外国語に強い関心を寄せていることは確かである。さらには彼らの作品が、翻訳という営みを踏まえることで、あるいは作中に翻訳的なメカニズムを内在させることで成り立っていることも指摘しうるだろう。日本文学が明治以降の展開において、幾重にも翻訳の恩恵を被っているのは常識に属する事柄である。しかしまさしく創作それ自体が翻訳を含みこむかたちで成立していることに關しては、なお深い考察が必要とされているのではないだろうか。

そこで思い起こされるのが、マルセル・ブルーストがその評論『サント＝ブーヴに反論する』の中に記した、「優れた書物は一種の外国語で書かれている」という有名な一句である⁽²⁴⁾。ブルーストのいわんとするのは、優れた文学書とは、読者の側の誤読を誘いがちなもので、しかもそのとき、どんな誤読であれ美しいという事態が生じるということだった。この言葉をあえ

て「誤読」し、そもそも、「一種の外国語」で書かれているという点に文学作品なるものの特色があるという主張として受け止めてみたい。つまり外国語の刺激を受け、その影響を被ること、母国語は「一種の」外国語的な性格、あるいは翻訳的な性格を必ずや帯びる。だが母国語の自明性が問い直され、ときには危機にさらされるようなそうした局面においてこそ、刺激的な文学作品の生成が可能になる。そのことをまざまざと例証する作品群によって作り上げられてきたのが、日本の近代文学なのである。

* 本稿は港区および明治学院大学言語文化研究所の共催による、みなと区民大学での講演（二〇一九年一〇月二二日）にもとづくものである。講演の際にお世話になった皆様に感謝を申し上げます。

註

1 首相官邸HP「新元号の制定について」(https://www.kantei.go.jp/jp/headline/singengou/singengou_sentei.html)

2 『万葉集』を、「幅広い階層の人々」の作品を集成し「我が国の豊かな国民文化」を象徴する古典とする見方が、いかに明

治以降に形作られてきたかを跡づけた刺激的な研究が品田悦一『万葉集の発明——国民国家と文化装置としての古典』新曜社、新装版、二〇一九年である。

- 3 『原文 万葉集』上巻、岩波文庫、二〇一五年、佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、二二六ページ。返り点は省略した。なお首相の引用した訓読は中西進『万葉集 全訳注原文付』(一)、講談社文庫、一九七八年、三七七ページによるものと思われる。

- 4 中西進『万葉の秀歌』ちくま学芸文庫、二〇一二年、一四六ページ。

- 5 大槻文彦編『箕作麟祥君伝』(一九〇八年)、『日本近代思想大系15 翻訳の思想』岩波書店、一九九一年、三〇五—三〇六ページ。

- 6 箕作らの翻訳作業には、ヘンリー・ホイートン著『万国公法』(Henry Wheaton, *Elements of International Law*, 1836) のウィリアム・マーティンによる中国語訳がお手本として重要な役割を担ったとされている(松井利彦『漢訳「万国公法」の熟字と近代日本語(近代語の研究)』、『國語と国文学』第六二巻第五号、一九八五年、六七—七七ページ)。中国語はこども、日本語が飛躍するための基盤を与えていたのである。なお「自由」「権利」「個人」といった語がどのように翻訳によって作られたかについては、柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、一九八四年を参照のこと。

- 7 宗像和重『小説』の誕生、『敗者』へのまなざし、坪内逍遙『当世書生気質』解説、岩波文庫、二〇〇六年、三一五ページ。

- 8 『当世書生気質』の引用は坪内祐三編集『明治の文学』第4巻 坪内逍遙 筑摩書房、二〇〇二年、脚注・花崎真也、篠

原紀子による(一八八六年に晩青堂から上下二巻で出た同書初版に基づく刊本)。以下、引用に際し随時ページ数を示す。なお注7の岩波文庫版は、のちに逍遙が同書に修正を施して『逍遙選集』別冊第一(一九二七年)に収めた版に基づいた『定稿』だが、初版には当初の状況をよりなまましく伝える意義がある。

- 9 北村透谷『厭世詩家と女性』、『明治文学全集』29 北村透谷集 小田切秀雄編、筑摩書房、一九七六年、六四ページ。

- 10 大島真木『谷崎潤一郎の翻訳論』『近代日本の翻訳文化』前掲書、三六八ページ。

- 11 永井荷風『あめりか物語』岩波文庫、二〇〇二年、二七三—二七四ページ。

- 12 以下の論には既発表の拙著・拙論と重複する部分がある。野崎敏『谷崎潤一郎と異国の言語』人文書院、二〇〇三年、中公文庫、二〇一五年。Kan Nozaki, « Tanizaki et la renaiance des langues étrangères : de *L'Esprit du Kaiser à Susukita* », *L'Aure de l'aure*, sous la direction de Yoshikazu Nakaji, PUV, 2007, 6, pp.81-90.

- 13 「独探」、『谷崎潤一郎ラビリス』Ⅵ 異国綺談 千葉俊二編、中公文庫、一九九八年、一一—一〇ページ。以下、引用に際し随時、同書のページ数を示す。

- 14 谷崎潤一郎『文章読本』(一九三四年)、中公文庫、一九九六年、七九ページ。

- 15 注12に挙げた拙著第五章「翻訳の空間へ——『正』を参照のこと」。

- 16 谷崎による「正」書き換えの様相に最初に注意を喚起したのは河野多恵子『谷崎潤一郎と肯定の欲望』(文藝春秋、一九

七六年)である。ただし河野は最終的な『正』の文体に対し「如何にも観念的に選択されたものにすぎない」、「大阪言葉的標準語にはなりえていない」と否定的な評価を下している。

- 17 井伏鱒二におけるロシア人の主題をめぐっては拙稿『オータム吉日』——井伏鱒二と流謫の言語「れにくさ」沼野充義教授退職記念号、東京大学文学部現代文芸論研究室、二〇二〇年三月、三七三—三八四ページをご参照いただきたい。

- 18 その翻訳とはズウデルマン「父の罪」井伏鱒二訳、聚芳閣、一九二四年である。「牛込鶴巻町」(一九三七年)での回想によれば「私は翻訳料で自転車を買うつもりから、銭湯に行く以外には殆ど外出しないで翻訳した」とある。版元の聚芳閣は井伏が一時務めた出版社だが、「この翻訳の仕事が、すでに勤務してからなされたのか、それとも勤務以前の依頼、もしくは持ち込みであったのかは、はっきりとは分からない」(涌田佑「井伏鱒二事典」明治書院、二〇〇〇年、一七三ページ)。
- 19 先行する翻訳としては登張竹風訳「売国奴」金港堂、一九〇五年、および小宮豊隆訳「罪」博文館、一九一四年があった。登張訳は全二〇章のうち二五章の抄訳、小宮訳は全訳。井伏訳は一章の抄訳である。英訳はHermann Sudermann, *Regina, or The Sins of the fathers*, translated by Beatrice Marshall, J. Lane, 1922を参照したものと推測される。ただし田村幹比古の比較研究によれば、井伏訳には「英訳本の語彙とは異なるドイツ語版原点からの訳語も多い」という。涌田、前掲書、二六七ページを参照のこと。

- 20 涌田佑「初期井伏文学の諸相——ヘルマン・ズーデルマンの影響を中心に——」「すばる」一九七九年二月号。涌田佑『井伏鱒二事典』、二六七ページ。

- 21 詳しくは拙著『水の匂いがするようだ——井伏鱒二のほうへ』集英社、二〇一八年、第三章「ドクトル・イブセの翻訳教室」を参照のこと。

- 22 『井伏鱒二全集』第一巻、筑摩書房、一九九六年、二九五ページ。新仮名遣いに変更。以下、井伏作品からの引用は同全集版により、巻数とページ数を付す。

- 23 福山の田舎に生まれ育った井伏にとつて、初めて耳にした標準語がきわめて異質なものとして響いたことが、「言葉」(一九二六年)から「半生記」(一九七〇年)に至る自伝的エッセーの数々で強調されている。なお方言を話す朽助が「オータム吉日」の英語と日本語を結合させた表現が示すとおり、異言語を横断する存在でもある点については、注15の拙稿で論じた。

- 24 マルセル・ブルースト「サント＝ブーヴに反論する」出口裕弘、吉川一義訳、『ブルースト評論選 I 文学篇』保苅瑞穂編、一九五ページ。ただし拙稿の文脈に合わせ訳文は一部変更させていただいた。